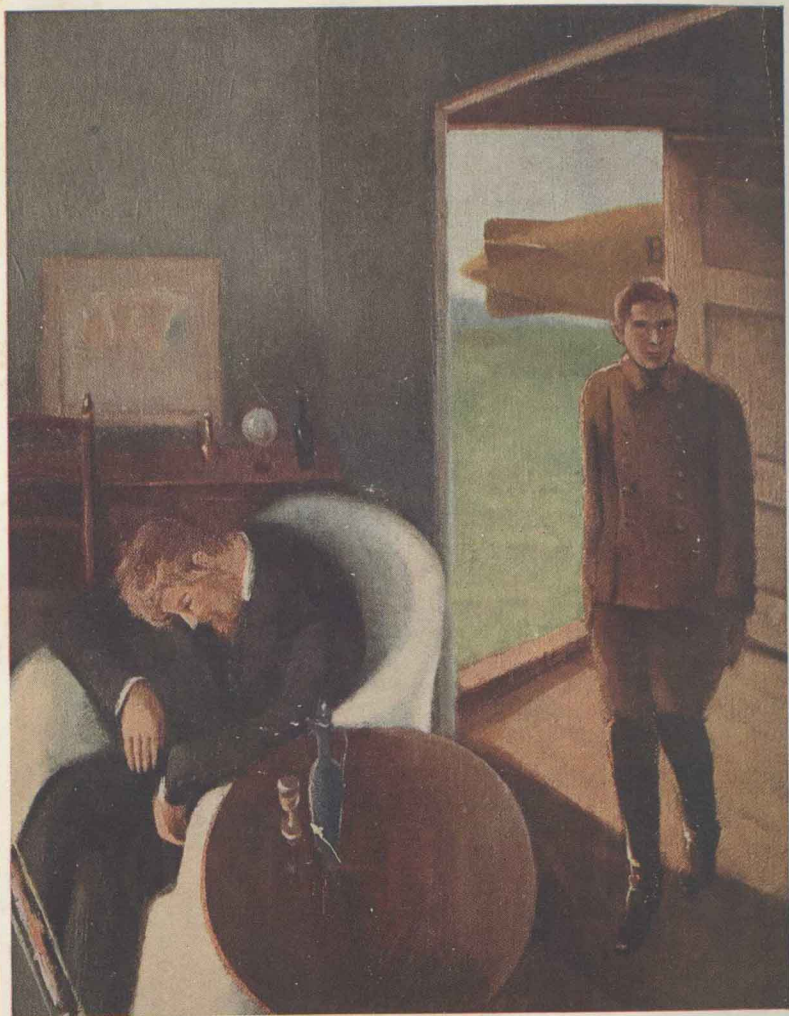




TONO-BUNGAY

By
H. G. Wells

作ズルェウ・イジ・チイエ

イゲンバ・ノート

譯 郎 三 新 島 宮

版 出 社 潮 新

第十一回配本

昭和六年五月三十日印刷
昭和六年六月五日發行

翻譯者 宮島新三郎

發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町

發行所
新潮社

電話牛込

長
八八八八八
〇〇〇〇〇
九八七六五
番番番番番

振替東京 二三、四五〇番

東京市小石川區江西戸川町 富士印刷株式會社印刷

解 説

一、ウェルズ略傳

H(ハアバート)・G(ジョージ)・ウェルズは、今日では大倫敦の中に繰込まれてゐるケント州のブラムリに、一八八六年(慶應二年)九月二十一日に生れた。父は餘り大きくない雜貨商を營み、傍、クリケットの職業圓球手であつた。母はサセックスのさる宿屋の娘で、或る貴婦人の邸宅に女中奉公をしてゐたこともあつた。元より裕福な家庭ではない。中流階級の中でも寧ろ下層に屬する方であつたらしく、ウェルズは幼少の折から、可なり生活の上では苦い經驗を嘗めなければならなかつた。彼の作『靴の悲哀』(一九〇七年)には地下室が居間であり、食堂であり、寢室である家族の生活が描かれ、その部屋の窓からは、往來を通る靴の底や足ばかりしか見えないことが述べてあるが、それはウェルズ自身の生活體驗の偽らない告白であるに相違ない。家庭が既に貧しかつたから、彼の受けた教育も亦變則的であつた。『二十世紀の文學』の著者A・C・ウオードは、「マアシルシイの刑務所と靴墨工場とがなかつたら、ディキンズは生れなかつたらう。地下の臺所と破れた靴と『教育の蔭になつた谷間』とがなかつたら、H・G・ウェルズは生れなかつたらう。」と述べてゐるが、確かに至言である。

ウェルズが十三になつた時、店は破産し、それと殆んど同時に、父が亡くなつた。そこで母は元勤めた貴婦人の邸宅に女中頭となつて住むことになり、ウェルズは今まで通つてゐた田舎の小學校を罷めて、一時は母と一緒にその邸宅に

行つてゐたが、間もなく、藥種屋の徒弟になつたり、呉服店の小僧になつたりして、生活と戦はなければならなかつた。この時代のこと、彼の後の創作の幾篇かに自叙傳的に描かれてゐるが、特に『トーノ・パンゲイ』の中には、ブレイズオウヴァ時代としてはつきり映し出されてゐる。彼はその頃始めて頽廢して行く封建制度の嚴かな現實を幼い驚異の眼を以て見ることが出来たのである。『トーノ・パンゲイ』は、或る意味で實にこの現實に對する彼の直視から生れたといつてもよい。

ウエルズは藥種屋にも呉服店にも満足しなかつた。彼は常に勘定臺の彼方を眺めては、生々した世界に憧れ、「一層高い教育」を求めないではゐられなかつた。終に彼は十五歳の時にその勘定臺を跳越えて、幸にもサセックスのミッドハースト中學校長ホールレス・バイアット氏を知つてゐたので、その學校の生徒兼助手にして貰ふことが出来た。一八八三年には倫敦の南ケンシントンの理科大學の給費生となつた。そこで三年間有名なハックスリ教授の下で自然科學を勉強し、他方では倫敦を歩き廻つて、時には政治の集會に出て見たり、時にはウィリアム・モリスの社會主義に關する講演を聴いたり、又時にはグラッドストーンの地方自治に就いての演説に耳かたむけたりした。二十歳になると、ノース・ウエルズの或る學校に代用教師として赴任した。だがそこで不幸にも蹴球で負傷をし、一八八七年再び倫敦に歸つて、キルバアンにあるヘンリー・ハウス・スクールの教師になり、その間に倫敦大學で理學士の學位を得るに至つた。一八九〇年頃であつたらしい。それから二年ばかり、大學講義錄學會の教授となり、そこで彼は未來の妻エミイ・キヤサリン・ロビンズと知合ひになつたのである。

一八九三年の夏に、彼は重患にかゝり、動き廻る仕事が可能になり、書齋で出来ることを選ばねばならなくなつた。かくしてイーストボウンに於ける靜養中から彼のジャーナリズム生活は始まつた。尤も讀書と執筆とは以前から

彼の好むところであつて、理科大學にゐた最後の年即ち一八八六年には、同大學の機關誌『ザ・サイエンス・スクール・ジャーナル』を創刊し、編輯もすれば執筆もした。又ヘンリ・ハウス・スクールにゐた時も、その學校の機關誌の編輯主任であり、同時に寄稿家でもあつた。一八九一年には彼の論文が始めて『各週評論』に載り、それ以後小論文が主に教育雜誌に時折現はれるやうになり、一八九三年には『生物學教科書』が處女出版の運びにさへなつた。このやうにして、一八九三年から四年にかけては、『ペル・メル・ガゼット』、『サタデー・レビュー』、『ネーチュア』等の雜誌の堂々たる寄稿家となり、こゝに彼のジャーナリズム生活が確立されるやうになつたのである。引續いて一八九五年には、短篇小説集二冊と長篇小説二篇とを世に問うて、作家生活の基礎を築いた。『叔父との對話選』、『盜まれたバチルス』は共に短篇小説集であり、『時の機械』、『驚異的探訪』は何れも長篇物語に屬する。

爾來彼は小説たると、論文たると、隨筆たるとを問はず、あらゆる方面の文學活動（戲曲と詩歌だけは創作したことがないらしい）に全力を傾けて今日に及んで居り、その著作の數は實に多く、精力の絶倫なること、到底他の作家の及ぶところではない。しかも論文の範圍に至つては、小説論から社會、經濟、科學、歴史等の研究に亘つて、専門家以上の役割をさへ演じつゝある。彼の活動は、たゞに著作の方面ばかりではなく、一九〇七年から八年頃にかけては、フエービアン協會に加つて、いはゆる漸進的社會主義のために奮闘し、また一九二二年及び二三年の總選舉の折には、倫敦大學區を代表して立候補し、政治にも關係し、更に一九二一年ワシントン會議の時には、デーリー・メールの代表として華々しい活動したのである。しかし、何といつても、彼の本領は著述家であり、更に限定するならば、創作家である。

二、ウエルズの著作

ウエルズの著作は、前にも述べたやうに、その種類が多方面に互り、又その数が實に多いので、到底茲で細かく分類し、一々列挙することは不可能である。しかし幸ひにも、『現代英國文學』の編者マンリ及びリッカートの試みた分類があるので、假りにそれに依ると、(一)小説及びその他の長篇物語、(二)ユートピア物及び社會改造の物語、(三)短篇小説、(四)哲學及び感想、(五)隨筆及び研究、(六)歴史及び傳記に分けて、それらの項目の下に各著作が配列してある。如何に多作多方面であるかは、これに依つても明かである。

彼の著作全體が多方面であると同様に、彼の小説も亦色々な種類から成立つてゐる。ウエルズの一般研究家が分類してゐるところに従ふと、三種類ある。第一は科學及びユートピア物語、第二は寫實小説、そして第三は社會小説である。この分類に従つて彼の主なる小説を舉げて見ると左の通りである。

一、科學物語

『時の機械』(一八九五年)

『驚異的探訪』(一八九五年)

『見えざる人』(一八九七年)

『世界の戦争』(一八九八年)

『眠れる人の醒むる時』(一八九九年)

『月世界の最初の人々』(一九〇一年)

『空中戦争』（一九〇八年）

『自由になつた世界』（一九一四年）

『神の如き人々』（一九二三年）

『夢』（一九二四年）

二、寫實小説

『愛とルイシヤム』（一九〇〇年）

『キプス』（一九〇五年）

『アン・ヴェロニカ』（一九〇九年）

『ボーリ氏の歴史』（一九一〇年）

『結婚』（一九一二年）

『アイザアク・ハアマン卿の奥方』（一九一四年）

三、社會小説

『トノ・パンゲイ』（一九〇八年）

『新マキアベリー』（一九一〇年）

『ブリットリグ氏は見通す』（一九一六年）

『ジョンとピーター』（一九一八年）

『クリスチナ・アルバアタの父』（一九二五年）

『ウィリアム・クリッソールドの世界』（一九二六年）

『その間に』（一九二七年）

『パースラム氏の獨裁』（一九三〇年）

彼の小説は、このやうに分類はされるものの、概括的に見れば、科學と社會學と彼の理想とのコンビネーションである。科學の要素が多いか、社會學のそれが多く、乃至は、彼の理想がより、はつきりしてゐるかに依つて、以上のやうな種類別が生ずるのである。しかも根柢には常に現實に對する明確な認識が働いてゐる。彼の思想生活はこの現實認識から出發して、在來のヴィクトリアニズムに反抗し、理想的な新しい社會の建設に向つたのである。この意味で彼は二十世紀英國の最も新しい思想家のチャンピオンである。同時に又彼は英國小説界の革新者でもある。上品な、四角四面な、他所行きの客間藝術を人生の爲めの藝術、社會の爲めの藝術に解放した先驅者の一人である。事實英國の小説は、トマス・ハーディあたりからそろ／＼革新の氣運が動き、二十世紀に這入つて、ウェルズを始め、キップリング、ベニット、ゴウルズワージー、コンランド等に依つて、内容も形式も共に一新されたのである。彼等は普通に英國小説壇のビグ・ファイヴズ（五大作家）といはれてゐるが、尤もなことであると思ふ。

就中、ウェルズは小説革新の第一人者である。彼は最初から藝術の爲めの藝術を極力排斥し、社會の爲めの藝術を主張した。彼は『現代の小説』といふ論文の中で、「小説は社會的仲介者、理解の傳達者、自己検討の機關、道德の展覽場、禮儀の交換所、習慣の工場、法律や制度、社會的獨斷や觀念の批評たるべきだ。」と述べてゐる。又、「吾々は政治上の問題や宗教上の問題や社會上の問題やを取扱はうとしてゐる。吾々はこの自由な手を持つにあらざれば、この無制限な分野を持つにあらざれば、人間を表現することは出来ない。」ともいつてゐる。在來の藝術至上主義の考へ方

とは全く違つた新しい小説宣言である。

彼に取つては小説は彼の抱懷してゐる思想、社會に對し、制度に對し、人間に對して考へてゐる思想、それらをどうすればよいかに對して抱いてゐる彼の理想を發表する機關に過ぎない。小説を書くことはそれ自身が目的ではなくて、手段である。彼は嘗つてヘンリー・ジェームズに向つて、「あなたに取つて文學は繪畫のやうに目的でせうが、私に取つては、それは建築の如く手段です。」と語つたといふ。小説に對する彼の新しい抱負が、まぎ／＼と感ぜられるではないか。この抱負に基いて彼は今日まで小説を書いて來たのである。

この抱負からすれば、自然、脚色とか結構とか筋とかいふ形式の方面も異らざるを得ない。事實彼の小説は在來のさういふ規定を殆んど無視してゐる。又同時代の作家とも異つてゐる。どうかすると、彼の小説は經濟論や政治論や社會學の議論ではないかと思はれるやうな場合もある。それほどに、在來の小説構成法を不問に附してゐることがある。しかもそれでゐて讀んで面白い。滋味がそれからそれと湧き出て來る。彼が議論家であると同時に藝術家だ、小説家だと思はせるのはこの點である。

彼は凡そ停滯といふことを知らない躍進的作家である。彼の思想や理想は絶えず時代と共に變つて行く。けれどもそれは出鱈目の變化ではなく、必然的な推移であり、進歩である。彼は一時フエービアン協會に加盟して、その社會主義に共鳴してゐたが、やがてそれは初めの終りであることを知つて、これを排撃するやうになり、今日では一般的の社會主義にも信用を置いてゐないで、世界共和國の建設といふ一大理想に向つて邁進しつゝある。

彼は前に分類して示して置いた小説の殆んど凡ては、その時々抱いてゐた思想や理想を裏付けることを忘れてゐない。従つて彼の小説を年代順に讀んで行くことは、彼の社會思想發展史を辿ることに他ならない。それは又英國社

會の推移、英國人の心の動きの跡を知ることでもある。

思想を披瀝すること、理想を宣傳することが何よりも急務であり、その上に多作なのであるから、ウエルズの作品必ずしも傑作ばかりとはいへない。中には、今少し彼に時間をかし、推敲の餘地を與へたらと思はせるやうな作品もある。しかしどんな作品にも作者の熱と力とが漲り溢れてゐるので、讀ます力を持つてゐる。それから又傑作といはれるものも相當に多い。見る人々の立場に依つて評價の仕方に違ひはあるが、多くの批評家が一致して最も傑出した作だと認めてゐるのは、こゝに譯出した『トリーノ・パンゲイ』である。

三、『トリーノ・パンゲイ』に就いて

ウエルズと同時代の先驅的作家アーノルド・ベニットは、「偉大な作品が傳へてくれる一種の感激を以て『トリーノ・パンゲイ』を讀了した時云々……」『書物及び人物』中の「ウエルズ論」(一九〇九年五月四日)といつてゐる。又『ウエルズ傳』の著者ベレスフォードは「いろいろの意味で『トリーノ・パンゲイ』はウエルズ氏が吾々にこれまで提供した小説の中で最も優れたものである。」と評してゐる。それから、『近代英國小説』の著者ジェラルド・バレットに據ると「『トリーノ・パンゲイ』は長篇社會小説の最初のものであり、そして最傑作として今日まで残つてゐる。」何れの批評を見ても、『トリーノ・パンゲイ』はウエルズの作中最も優秀なものであることが承認されてゐる。勿論それだけの批評の試みられた後に尙ほウエルズは多くの作品を發表してゐるから、それ等の全體を通じて見た評價は自づから異つて來ることはいふまでもないが、譯者も亦以上に擧げた諸家の評價に同意を表する者の一人である。尤も彼の思想の集大成と見られ、構成力の偉大さを示すものとしては、一九二六年に出した『ウィリアム・クリンソールドの世界』の如き作があるが、藝術性

の點で矢張り『トノ・パンゲイ』に及ばない。『トノ・パンゲイ』は實に彼の思想と藝術性とが最も巧みに調和した渾然たる作品である。或ひはこれがウエルズ生涯の最大傑作になるのではないかとも思はれる。

この作品は構成の上から見ると、可なり複雑してゐる。それ故、始めて讀む人の便宜を計つて、多少の分析を試みて置かう。これはウエルズが意識して書き出した最初の社會小説である。果して何を取扱はうとしたのであるか。これに對しては『二十世紀の文學』の著者ウオードが明解な答へを與へてゐる。即ち「この書は近代の英國に於いて第一に主要な問題の力強い表現である。つまり貴族階級の崩解……と金持の香具師的商人と冒險家との擡頭とである。」封建治下の土地貴族が工業資本主義の下で次第に影を潛めて行く過程は、ブレイズオウヴァ時代に、實にはつきりと描き出されてゐる。頽廢した貴族、それはカアナビー卿とビアトリス姫とに依つて代表されてゐる。ウエルズは少年の折の経験から、かうした雰圍氣を巧みに寫してゐる。さてこの貴族社會の崩解した跡に何が生れて來たか。それは企業である、やまかん仕事である。近代の新聞、いひかへれば廣告術に依る事業である。空手形を相手にする大事業である。そしてこれに依つて巨萬の富を積む商業王の出現である。實業界のナポレオンの出現である。其處に恐るべき虚偽が行はれてゐる、不正が通用してゐる。それが現代の商業資本主義の社會だ。其の封建制度は仆れた。だがそれに取つて代つた社會は果して正しいものか。こゝにウエルズの關心が存するのである。彼はこのやうな社會を以て決して正しいもの、理想的なものとは思つてゐない。それ故にこそ虚偽の土臺の一角が崩れ始めると、全事業が忽ち崩壊する過程をも彼は描いたのである。これが全國的に擴がつた時、社會はどうなるか。そこに非常に重大な問題がある。ウエルズは決してそれを正面から説いてはゐないが、心ある讀者の胸に訴へてゐるのである。その意味では現代商業主義の社會を暴露したものといへる。その爲めかどうかはよく分らないが、この作は多くの新聞から掲載を禁止され、そ

の結果、最後に雑誌『英國評論』に連載されることになったといふ話である、その期間は一九〇八年十二月號から翌年三月號までである。この作では商業界のナポレオンは主人公格のエドワード・ボンダレヴォーで、彼の武器が、即ちこの作の名前になつてゐるトーノ・ベンゲイといふ怪しい賣藥である。ボンダレヴォーはこの賣藥に依つて一躍巨萬の富を積み、又一朝にしてそれを失ふのである。その内面的なカラクリは如何なる統計や經濟學に依つてもこれほどに鮮かには現はされないだらうと思はれる。そのカラクリを描くためにウエルズは十九世紀の後半から二十世紀に至る英國社會の狀態や風習や人心の動きを材料に用ひてゐる。従つて、『トーノ・ベンゲイ』は現代英國社會の一大パノラマである。

この一大パノラマをどういふ角度から映し出してゐるかといふと、ベニットが、「それはジョージ・ボンダレヴォーの魂とその時代との衝突の歴史である。それは知識的に正直であり、權力的に知的である人の良心といふ法廷に於ける一時代全體の訊問である。」と述べてゐるやうに、甥のジョージといふ正直な學問愛好家の視野を通じてである。従つて、この作の構成は叔父ボンダレヴォーとその事業とを蔽ふ部分と、甥のジョージとその研究即ち航空機發明との部分にわかれる。又この二人は事業で結びつくこともある。更に人物の方から見ると、叔父の側に於けるスウザン叔母をはじめとして、その他の事業に従事してゐる多くの怪し氣な人々、甥の側に於ける戀愛の對象たる幾人かの女性や友人、更に頽廢貴族のカアナビー卿やビアトリス姫等が、それ／＼この物語の緯となつて活躍する。人物はいづれもユニークな存在として描かれてゐる。特に、叔母スウザンの性格描寫のときは、現代英文學中でも、獨特なものではないかと思はれる。

この物語はジョージが過去を思ひ出しながら書いて行くといふ形式をとつてゐるので、多少ごた／＼した感じはあ

る。けれども事件や行動や、人間心理の微妙な動きなどの描寫が自由であり新鮮であるために、その弊を補つてゐる。社會小説でこれほど細かな味ひを出した作は渺ないのではないかと思ふ。

原文は可なり自由自在奔放でさへあつて、可なり難解な文章に屬するものである。譯文は可なり注意してその原意を出さうとした爲めに、少し堅くなり過ぎた氣味がないでもない。それに今少し推敲の餘裕が欲しかったのであるが、思ふにまかせなかつた。豫め讀者に寛恕を乞ふ次第である。兎にも角にも、評判のみ高くして、未だ殆んど紹介されてゐない日本の文藝界に、ウェルズの長篇小説を送り得たことは、譯者に取つての一つの喜びである。本譯書に依つて、この喜びが廣い讀者層の間に頒つて貰へることを切望する。(宮島新三郎)

目次

第一編	ト一ノ・バンゲイの發明されなかつた時代……………	一
第二編	ト一ノ・バンゲイの出現……………	二八
第三編	ト一ノ・バンゲイ全盛時代……………	三四
第四編	ト一ノ・バンゲイ後日譚……………	四〇〇

トリーノ・バンゲイ

エイチ・ジイ・ウェルズ作
宮島新三郎譯

第一編

トリーノ・バンゲイの發 明されなかつた時代

第一章 ブレイズオーヴァ家と私の母

それから社會組織に就いて

世間の多くの人たちは「振役に應じて」生活してゐるやうに見える。誰にしても始めがあり、中頃があり、そして終りがあつて、その三つはそれ／＼繋がつてゐて、しかも、各々特有な法則を何處までも守つてゐる。彼等は、一々このやうな人だ、あのやうな人だといはれる。全く芝居道の人々がいふやうに、「性格俳優」以上ではなく、それかとい

つて、以下でもない。彼等には、それ／＼の身分があり、地位があつて、皆自分たちに相應しいことや、自分たちに當然なことやを辨へてゐる。そして詰るところ、どの位適當にその役割を演じたかは、その墓石の適當な大きさが語つてくれる。けれどもまた生活するといふよりは寧ろいろいろに人生を味つて行くといふやうな別の生活もある。何かしら異常な、横からぶつかつて來る力に、しんとやられる。急に今迄の生活層から投げ出され、それからといふものは生活が逆轉して、謂はゞ一續きの標本みたいな暮らしをする。それがまさしく私の運命でもあり、終に私に何か小説のやうなものを書かせるに到らせたものでもある。私には是非とも聞いて貰ひたいと思ふ印象がそれからそれと數限りもなくある。私は非常に異つた／＼の段階から人生を眺めて來た。しかもさういふ／＼違つた段階から、親しく、忠實にそれを眺めて來た。私は／＼な社會に生活して、其處をすつかり知りぬくやうになつた。私は製

パン屋の伯父の許に厄介になつてゐたこともあるが、その伯父は後にチタム施療院で死んでしまつた。それからまた、食器部屋で御法度の食物——表向きには認められない従僕達の贈物——を食べもしたし、風采があがらないといつては、或る瓦斯會社の書記の娘（後には結婚してまた別れてしまつた女だが）に蔑まれもした。それからこれとは反對の極端な生活に就いていへば——私は嘗ては——おお、あの華やかなりし頃よ！——伯爵夫人の別荘客の一員となつたこともある。彼女は財産があつての上の伯爵夫人だつたといふは認めるが、しかもなほ伯爵夫人であることに變りはなかつた。私はこれらの人々を色々の角度から眺めた。私は晚餐の席上で單に爵位を持つてゐるばかりではない實際に大きな人物にも會つた。一度など——それは自分の最も輝やかしい記憶であるが——互ひに感嘆のあまり熱狂して、帝國最大の政治家のズボンに三鞭酒をこぼしてしまつたこともある——神よ、私をしてあの人の偉大さをひどく猜んでその名を擧げるやうなことはさせないでくれ！そして嘗ては（自分の生涯にふとした機會で起つたこれほどの大事件は二度となかつたが）、私は人を殺したことも

ある……

全く、私は奇妙にいろ／＼と變つた人々やその生活振りをやつかり見て來た。大きい人物だらうと小さい人物だらうと、彼等は皆一風變つた人たちで、底を割つて見れば、非常に似通つてゐながら、表面は妙に異つてゐる。あんなに廣く世の中を渡り歩いて來たのであつて見れば、私は、上層下層の兩方をもうほんのちよつとでいゝから先まで進んで見たらよかつたと思ふ。王家を知る分に損はなく、またそれは素敵に面白いことに相違ない。けれども極めて公式の場所以外では、私は王子たちと接する機會もなかつた。そしてまたその反對の方面でも、夏の日、酒に酔つてはゐるが、家族連れで（そのやうにして酒を飲んだといふ小さな過ちを償つて）、乳母車を押したり、賣物のラヴァンダ香料や、日に灼けた子供たち、特有の香と非常に想像をそゝる得體の知れない包みなどを、連れたり持つたりして街道を歩き廻る埃だらけな、それでゐて、へんに人の心を牽きつける人たちとは、極く内々の親しい交際といふほどの交際もしてはゐなかつた。また、土工や農場勞働者や水夫や火夫や、すべて千八百三十四年代のビーアホールに腰かけて